

# 高田養護学校の開学に尽くした徳山ミサヲの研究

丸 山 昭 生\*・小 杉 敏 勝\*\*・奥 泉 祥 子\*\*\*

(平成19年10月1日受付;平成19年11月12日受理)

## 要 旨

新潟県立高田養護学校は、昭和43年5月1日に創立された知的障害児のための養護学校である。新潟県内においては、知的障害児の養護学校としてすでに新潟県立月ヶ岡養護学校(三条市)が開校(昭和40年9月1日創立)していた。知的障害児のための最初の養護学校創設について、当時の塚田県知事は当初上越地区を考えていたが、その後の政治的な動きの中で三条市に決定した。このような動きの中で、「上越地区にも養護学校を」と、その創立に中心となって活躍したのが上越婦人協議会長をしていた徳山ミサヲである。

徳山は、脳性まひ児である孫の就学への叫びを直接の引き金とし、上越地区連合婦人会の組織を背景に養護学校創立のために壮絶な運動を繰り広げ、その夢を実現させた。この運動が成功した要因は多々あるが、徳山の自己犠牲の精神(捨身の願い)、小さな力(一粒の麦)の結束力、誰もができる運動(米1升運動)、労を厭わないねばり強さ(執念)、共感し運動を手助けしてくれる人との出会い(仏恩)などである。その結果、新潟県立高田養護学校の開学を迎えることとなり、徳山は子どもらの殿堂(学校)の創立に喜びの極みの涙を流したのである。

徳山のこの活動は、新潟県特別支援学校の開学に尽くした大森隆碩(高田盲学校)、金子徳十郎(長岡聾学校)、結核療養教師の笹川芳三ら(柏崎養護学校)に勝るとも劣らない功績であるといえる。

## Key Words :

徳山ミサヲ	MISAWO TOKUYAMA
高田養護学校	Takada School for children with intellectual disabilities
米一升運動	Movement of Kome Issho
上越地区連合婦人会	Joetsu Association of Women's Council

## 1 はじめに

新潟県内の特別支援学校の開学には、必ずと言っていいほど中核となって活動した人物がいる。高田盲学校の開学に尽力した医師の大森隆碩、長岡聾学校の開学に尽力した薪炭商の金子徳十郎、柏崎養護学校の開学に尽力した結核療養教師の笹川芳三らなどである。知的障害児の養護学校として新潟県で2番目に開校した高田養護学校も例外ではなかった。その人物は徳山ミサヲ(写真1)である。

徳山は、昭和31年(1956)から上越婦人協議会長をしていたが、当時、自身の孫(脳性まひ児)をはじめ、学校に行けない不幸な子どもが上越地区に511名(1963年1月現在)もいることに驚き、何とかしてこの子どもたちのための療育機関を作れないものかと考えた。徳山の願いは、昭和43年(1968)5月1日にその実を結び、高田養護学校が開学するのであるが、その間の活動は困難を極めた。

本稿では、徳山の活動の原動力となった精神的背景や、開学への運動、開学に漕ぎ着けるに至った要因、新潟県の特別支援学校開学運動における徳山の功績などについて考察することとした。

## 2 高田養護学校の開学の概要

昭和30年代は、各地区の精神薄弱者育成会などの運動もあって、全国的に精神薄弱養護学校創設の気運が高まっていた。新潟県で最初に創設



写真1 徳山ミサヲ(昭和44.11.3叙勲の日に)

された月ヶ岡養護学校も、精神薄弱者育成会、特殊学級設置校校長、特殊学級担当者、関係市町村の教育委員会等の後押しがあった。月ヶ岡養護学校創立15周年記念誌（1980）に寄稿の酒井によれば、実は、新潟県最初精神薄弱養護学校は、当時の塚田新潟県知事の意向により、上越地区に創設される予定であった。しかし、三条地区の関係者は政治的な取り組みを強化し、行政上の人脈を駆使して陳情したことにより、覆って三条市が学校創設の地となった。

このような中で、上越地区における養護学校創設運動は少し様相を異にして行われた。それは、学校創設の運動主体が婦人会であったということである。リーダーの徳山は、昭和37年（1962）上越婦人協議会を母体として上越心身障害児療育機関設置期成同盟会（以下期成同盟会）を設置し、自ら会長を務め、上越地区各郡市の婦人会員を即期成同盟会の会員に組織して運動を繰り広げた。この組織力を基盤とし、会員の力によって集めた基金を基に、執念深く陳情を繰り返し、ついに昭和43年（1968）に高田養護学校の創設に漕ぎ着けた。月ヶ岡養護学校に遅れること3年であった。

### 3 徳山ミサヲの生い立ち

#### 3. 1 出生と就学

徳山ミサヲが晩年刊行した歌集「来し方」（1979、写真2）の序文や長男文秀氏のあと書き等によると、彼女の生い立ちは以下のとおりである（表1、図1参照）。

ミサヲは、明治31年（1898）2月9日、新潟県中頸城郡潟町村の寺（西念寺）で兄（普行）に次ぐ第2子（長女）として出生した。その後、弟（義雄）と妹（寿）が誕生し、4人兄妹の中で育った。厳しい学者肌の父（義諦）と優しい母（初見）に育てられたが、幼少期、村人からは「お寺のへめ（姫）ちゃん」と愛称で呼ばれ、幸せに育った。幼児期には、祖母からもらった百人一首を暗記したり貝合わせの恋の歌などをうろ覚えしたりして、その後の和歌への芽を育んだ。

明治44年（1911）潟町村立潟町尋常小学校高等科を卒業したミサヲは、学資なしで学べる師範学校の公費奨学生をねらって夜学で勉強し、大正2年（1913）年、長岡女子師範学校の一部ヘトップで入学した。入学生は、上越地区からはわずか3人であったが、師範学校では、全寮制の中で国民教育の担当者としての素質をたたきこまれた。大正6年（1917）年3月、首席で免許状を授与され、同日、県知事より特別褒賞状と記念銀時計を授与された。

#### 3. 2 不本意ながらの教職生活、そして結婚

徳山ミサヲは、長岡女子師範学校卒業時、校長からの薦めもあってお茶の水高等女子師範学校進学への強い希望をもっていた。しかし、兄が慶応義塾大学在学中であり、経済的に苦しい家庭事情を考え、高等師範学校への夢を抱きつつも、その年（1917）から新潟県の小学校教師としての道を歩むことになる。ミサヲ19歳の年である。就職後も、密かに高等師範学校への入学準備をしつつも、16円の月給のうち8円を家に仕送りをしていった。しかし、その年（1917）の10月に父（義諦、56歳）、翌年（1918）の9月に兄（普行、24歳）が他界した。

家がこのような状況の中でも、高等女子師範学校への向学に燃えるミサヲは、母、妹、祖母を残し、ある大雪の夜に家出を敢行した。しかし、大雪で列車が不通のため、高田駅前の旅館に身を潜めていたところを、後を追って来た母に捕まってしまう。そして、「そんなに頑固なら母子の縁を絶ってゆけ。今日限り親でもない子でもない。どんなことがあっても家へ帰るな」ときつい勘当の宣告を受けてしまう。家は、弟がすでに叔父の家督を継いで離籍しており、妹はまだ6歳の幼女だった。このままだと生活力もなく頼る者もない家族となってしまう。このような家族を見捨てて、自分の望みのためにのみ生きることが人間の道でないと考えたミサヲは、死んだ思いでこの寺に残り、婿養子を迎えて家督を継ぐ決心をしたのである。

大正11年（1922）4月、ミサヲは写真さえも見ぬ寺の二男（秀雄）と結婚した。ミサヲ24歳、秀雄27歳であった。その後、火災にあった寺の建て直しや障害をもった孫の養育等に夫婦で協力しながら、42年間連れ添うことになった。夫秀雄は、昭和39年（1964）1月、69歳でこの世を去るが、ミサヲの懐古によれば、「夫は鋭い頭脳と徹底した実行力の持ち主である人間的な、人柄に魅力のある人物」であったと

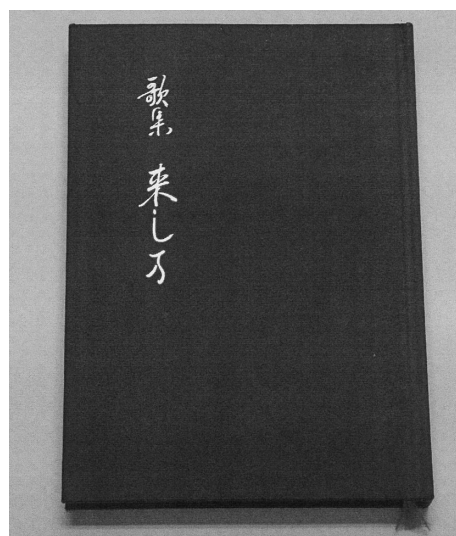


写真2 「来し方」

いう。

ミサヲは、高等女子師範学校への夢を絶たれ、不本意な中で25年間教職生活を過ごす、その間、本来の負けん気を発揮し、諸活動に専念し実績を残した。結婚後、3人の男子（長男文秀、二男昭秀、三男義秀）を授かるが、母（初見）や女中に養育を頼み、教職の道を歩み続けた。また、中頸城郡女教員会を創設して会長になったり、和歌研究に没頭したり、焼失した本堂の再建に奔走したりした。

### 3. 3 退職後の活動

生家の西念寺の本堂は300年間続いていたが、昭和15年（1940）12月13日、突然の落雷によって全焼した。翌年の昭和16年（1941）12月8日、太平洋戦争が勃発した中で本堂の再建に取り組むが、物資不足もあって大変な難事業となった。そのような中、昭和17年（1942）、ミサヲ44歳にして25年間の教職を退くことになる。母の老衰、本堂再建等の重荷がのしかかっていた不本意な退職であった。

退職後、夫と共に本堂の再建に精を出し、昭和18年（1943）4月、基礎と柱と瓦屋根だけの荒工事を終了する。この年、ミサヲらは、苦労して建立した未完成の本堂を、惜しげもなく農繁期季節託児所に解放する。翌年（1944）、季節託児所を改めて通年制の私立西念寺保育所（幼児100人余）を開設し、自ら園長となる。

一方でミサヲは、集落の婦人会を組織（1947）し、その後婦人会の拡大を図ったり、上越婦人会館を建設（1961）して初代理事長になったりと活躍を続けた。実は、この婦人会の活動が、後の高田養護学校開学への運動と結びついていくのである。

## 4 高田養護学校開学への運動

### 4. 1 運動の発端

婦人会等の活動を通して、充実した生活を送っていた徳山ミサヲであったが、後半の人生は、障害があつて学校へ行けない子どもたちへの対策に奔走することになった。その運動の発端となったのは、昭和31年（1956）8月27日、男孫（秀顕）が難産の末に脳性まひ児として生まれ、それによる後遺症で知的障害、言語障害、肢体不自由（ミサヲは三重苦という）を背負ったからである。

歌集「来し方」（徳山、1979）によれば、ミサヲはこのことに大きな衝撃を受け、孫を抱きながら夫に口説くことしきりであったという。夫は「泣くな嘆くな。どうにもならぬ我々の宿業なのだ。業を果たしつつ前進するのだ。涙をぬぐってこの子の前途を拓いてやろう」とミサヲを力強く励まし、ミサヲは夫の言葉に幾度も涙を拭いたという。翌年の春、股関節脱臼治療のため聖路加国際病院に入院（この時、付き添いで上京中の母親が突然失踪し、行方不明となる）するなど、病院巡りをしたけれども甲斐なく、結果「はまぐみ母子入園」ということになり、ミサヲは世捨て人にも似た気持ちで訓練のために孫と籠もったという。ここで、「治療の見込みのない重度の脳性まひ」という診断（新潟大学病院）を初めて受けた。ミサヲは、「母親のいないこの不幸な子の親になろう」と、夫（秀雄）と手を取り合って涙したという。

歌集「来し方」には、三重苦の孫の誕生の嘆きと、自ら孫に寄り添ってその障害の克服に挑むミサヲの心境が掲載されている。

「先天性脳性麻痺の診断は 鉄槌のごと脳天を打つ」（「5 宿業」）

「治療の途なしと宣べられ長き世の 辛さ思ひてほとほと泣く」（「5 宿業」）

「足萎えて物もえ言はぬ孫（こ）に従（よ）りて 世を捨てしがにはまぐみに入る」（「4 はまぐみ日記」）

「物言へとその頭さへ打ち叩き 焦れど悲し唇（くち）ふるふのみ」（「4 はまぐみ日記」）

はまぐみ母子入園で血と汗にまみれたような苦行の結果、ようやく歩き出し、片言らしい発音も出るようになった。しかし、昭和37年（1962）、孫（秀顕）が学齢に達しても「就学猶予」という「体裁のよい就学拒否」に遭い、それが続くことになった。秀顕は昭和38年（1963）にしき学園に入園するが、「ぼく、行くところがないんだ」と何年も叫び続けた。「ぼくもわたしも行くところがない」と叫ぶこの子らの仲間のために、明るい灯をかざしてやる場所を考えたミサヲは、ここで一大決心をする。そして、「吾れ一粒の麦たらんと」と「捨身のねがい」を固め、療育機関設置の運動を始めることとしたのである。

### 4. 2 養護学校の必要性

当時、養護学校の必要性は全国的に主張されていた。心身の故障等を理由とした全国の不就学児童生徒は、昭和30年に32,630人（内外教育、1955）、昭和40年に22,383人（内外教育、1965）いた。この者たちへの就学促進が強く叫



ばれていたのである。前述したが、新潟県においても養護学校創設の願いは強く、最初に月ヶ岡養護学校が昭和40年（1965）9月1日に創設されている。徳山ミサヲらの調査（1963）によると、上越地区では511名の不就学児童生徒がいたが、これらの子どものことを、高田養護学校創立十周年記念誌（1977）で次のように述べている。「私達の身辺にはいかに不幸の子の多いことか。物が言えぬ、見えぬ、聞こえぬ、手足がきかぬ、知能が足りぬ等々の子らは、友達が嬉々として学校へ行くのに、行く所のない不幸を嘆いている」

そこでミサヲは、不就学児童生徒の療育機関を創設するために、彼女が関与していた婦人会の組織を使い、上越一丸の組織力でこの願いの解決を図ろうと考えたのである。

#### 4. 3 開学への運動

##### 4. 3. 1 運動の組織づくり

高田養護学校の創立五周年記念誌の徳山ミサヲの述懐（1977）によれば、昭和30年代後半、上越母親と女教師の会の活動が活発であった。昭和36年（1961）の上越母親と女教師の会では、純粋な母親の慈悲と女教師の愛情とで、子どもたちの幸福を真剣に話し合った。この時の「恵まれぬ子の教育をどうするか」の部会では、児童相談所長山本克己の助言を受け、「団体の力でそうした子供達の療育機関を造る運動をおこそうではないか」と申し合わせた。ミサヲには、「国が教科書の無償配布に150億の金を出すのに、せめてその百分の一でもこれらの子に割いてもらえないのか。児童憲章はこんな子のためにこそあるのでないか」という強い思いがあった。そして、組織的な運動へと踏み出すことになった。

ミサヲは、昭和31年（1956）から上越婦人協議会会長をしていたが、この組織を土台とし、母親と女教師の会の協力を得ながら、昭和37年（1962）上越心身障害児療育機関設置期成同盟会（以下期成同盟会）を創設し、不幸で恵まれぬ子どもたちのための療育機関設置に乗り出した。期成同盟会のこの運動は、後世「米一升運動」と称されて語り継がれることになるが、その取り組みの概要は以下に述べる通りである。

まず、昭和38年（1963）3月、ミサヲは期成同盟会に、上越地区の婦人会員4万人を即会員として加入させた。委員長にミサヲ（中頸城連合婦人会長）自らが就任し、副委員長に渡辺カツ（高田市連合婦人会長）、和栗クニ（東頸城郡連合婦人会長）、委員に倉科春野（新井市連合婦人会長）、上原静（直江津市連合婦人会長）、金子うめ（糸魚川西頸城連合婦人会長）の布陣を敷いた。

##### 4. 3. 2 用地買収基金と署名集め

昭和39年（1964）11月、ミサヲらは、施設誘致のための基金を得るため、全会員4万人にもれなく趣意書を送った。その中身は、翌年の昭和40年3月末日までに、会員一人当たり米一升、またはそれに相当する125円（当時の価格）を寄付し、総額500万円の基金を集め、賛同の署名をも集めるという内容であった。

この運動に対し、多くの批判が出た。「県のする仕事に何も婦人会がおせっかいな」「会長が自分の売名行為のためにする仕事に協力の要なし」等々であった。ミサヲはこの運動を展開するにあたり、捨身の覚悟をしており、意に介さなかった。その心境を、次のように和歌にしたためた。

「一粒の麦たらんとて或る一夜 捨身のねがひ固めけるかも」

運動の結果、目標の基金500万円と4万5千人の署名簿（ダンボール5箱分）が集まった。これは、各地区会長はもちろんだが、地区役員の並々ならぬ苦勞があつての成果で、ミサヲは「正に愛と汗ににじんだ金だ」と語っている。その寄付金の内訳は下記の通りである。

・中頸城郡連合婦人会	1,565,000 円
・糸魚川西頸城連合婦人会	894,000 円
・高田市連合婦人会	685,000 円
・直江津市連合婦人会	585,000 円
・新井市連合婦人会	555,000 円
・東頸城郡連合婦人会	555,000 円
・上越女教員会	138,000 円

（なお、この基金は、その後用地買収の必要がなくなったことにより、全額期成同盟会に払い戻された。そして、カラーテレビ、公務用乗用車、ピアノ、学校通学道路買収費、学校園造成費用等、高田養護学校の教育充実のために使途された）

##### 4. 3. 3 基金と署名簿を駆使した陳情活動

ミサヲらは、基金や署名集めと併行して陳情活動も行った。地元の高田市、上越一丸、県関係へと次々と陳情を繰り返した。そのため、書類の作成等も相まって、その仕事量は大幅に拡大していった。しかし、ここに具体的な基金

と署名簿の後押しがあったので、運動にも拍車が掛かったのである。

ミサヲらは、ダンボール5箱分の署名簿と500万円の貯金通帳等を証拠品として塚田県知事公舎に持参し、強力に学校開設を迫った。塚田知事もさすがにこれには驚き、「よくやったネエ、わかりました」と、必ず願いをかなえてやると確約した。しかし、これに飽きたらず、塚田知事が高田盲学校の運動会に訪れた折にも、渡辺カツ（高田市連合婦人会長）とともに執念深く懇願を重ねた。新潟地震（1964）の後片づけもままならない中であって、知事は、「徳山さん、そんなに急ぎなさんな。地震の後片づけが終わるまで待ちなさい」ということであつた。

地域でも激しい陳情活動を引き続き行った。上越振興協議会、上越市町村長会や議長会などが開かれると聞くと、期成同盟会の役員である郡市の連合婦人会長らとともに陳情に押しかけ、発言を求めては「是非この実現を」と一席ぶって歩いたという。「かあちゃん達は強いナァ」と感嘆の声も随分聞いたという。

ミサヲはこの時の陳情の心境を、後日、以下のように和歌に詠んでいる。

「一粒の麦たらんとて身の程も 知らぬ悲願に執念（しつこ）くも起つ」

#### 4. 4 後押しする人との出会いと方向転換

徳山ミサヲらの活動の手法はまったく無手勝流であり、法令や規則に則ることや慣例に則ことはまったくなかった。ただ、かつて上越婦人会館を建てた経験（後述する）のみを頼りとする運動であつた。

挫折を繰り返しながらもミサヲらの願いが成就したのは、ミサヲ一人のみの力によるもので無いことは言をまたない。高田養護学校創立五周年記念誌（1972）に寄稿したミサヲの「捨身の願い」や創立十周年記念誌（1977）に寄稿した「生みの悩み生みの喜び」によれば、当時の塚田、亘県知事や県の教育行政関係者、地元の市長や行政関係者の多くの名前がずらりと出てくる。しかし、最もミサヲに力を与え、彼女を支えてくれた人、それは後に初代高田養護学校校長となる中村憲三であつた。

ミサヲは、「…ところが神仏は私達を見捨てなかった。まことによい指導助言者に出会ったのである。五里霧中の私は訴えるところを求めて出県し、ふと疲れた心身を新潟ホテルのロビーに運んだ時に、全く偶然に中村憲三先生との出会いに恵まれたのである。不思議な出会い。わらにもすがりたい心情をききとって先生は、明るい今後の方向の示唆を与えてくださった」「結局、成果を促進するには、補助金の遅い厚生省関係の施設を望むよりも、案外早く金のさがる文部省関係の養護学校をねらったらどうか。期する高嶺はひとつ故早い方から着手しよう。幸いに県には精薄養護学校設立の動きもあることから、県の事情に詳しい先生は、早期実現の具体的運動方策を示してくださったのである」「先生のお母さんと渡辺カツ（高田市連合婦人会長）さんは、同年同輩の親しい間柄とか、そんな温情も加わって、まことに“出会い”ということが、事の方や成果に異変をもたらす偉大なる運命であり、仏の大命であるように思えてならない。このとき、中村先生に出会わなかったら、どうなっていたらうか。今も感無量のものがある」と述べている。

ミサヲは、この出会いによって意欲をさらに奮い立たせるとともに、早く金が付き、願いが最も早く成就するであろう学校の創設に運動を方向転換することになった。彼女は、この時の中村憲三との出会いの心境を、高田養護学校創立20周年記念誌（1987）に、次のような和歌で披露している。

「出逢ひとは有難きかなこの大人（うし）に 力を得たり仏恩（ぶつとん）とせん」（大人＝中村憲三）

なお、開学運動の最中である昭和39年（1964）1月15日、ミサヲは、よき理解者であり支援者であつた最愛の伴侶（秀雄）を失った。夫（秀雄）69歳、ミサヲ65歳であつた。長男文秀氏によれば、母ミサヲのこの悲しみは大変深く、後年、父秀雄への挽歌は150首に及んだという。

#### 4. 5 覚悟・苦労・喜びを和歌に込めて

幼少期から和歌に親しんだ徳山ミサヲは、高田養護学校開学への運動の中で、機微に触れて多くの和歌を詠んだ。この和歌を読み返すことで、その時々々の覚悟、運動の厳しさ、人との出逢の喜び、大願成就の喜び等を垣間見ることができる。高田養護学校の各周年記念誌やミサヲの歌集「来し方」には、大願成就の喜びの歌が多いが、以下、運動から学校設立までのミサヲの心境を、幾つかの和歌で探ってみることとする。

##### 運動への覚悟

「一粒の麦たらんとて或る一夜 捨身の願ひ固めけるかも」（前出）

「一粒の麦たらんとて身の程も 知らぬ悲願に執念（しつこ）くも起つ」（前出）

##### 運動の苦労

「おのおのの宿命（さだめ）とはして肯（うべ）なはん 抗（あらが）ひすとも掟厳しく」

「この子呂に光はあれと母我等 叫び続けぬ六つ年（とせ）の日々」

### 人との出逢い

「出会とは奇しきものかはこの君に 力たびたり佛恩とやせん」  
 「出逢ひとは有り難きかなこの大人（うし）に 力を得たり仏恩（ぶつとん）とせん」（前出）

### 大願成就の喜び

「暁に近しと知れば今日の日の 念（おも）ひの血汐沸（たぎ）りたちくる」  
 「燃り合えば母の毛綱は強かりき この子呂の家かくも建ちけり」  
 （1972年建立の「結願の像」に刻む 写真3）  
 「殿堂はついに成りけり喜びの 極みの涙に光る柏楊」  
 「幸うすき吾が子委ねてたらちねは 笑（え）まひ静かに悦（よろこ）び交わす」



写真3 結願の像

## 5 徳山ミサヲの社会的活躍・貢献

### 5. 1 女教員会の活動

前述したとおり、徳山ミサヲは高等女子師範学校への入学を諦めざるを得なくなり、不本意ながら小学校の教員となるが、生来の負けん気で上席女教員として25年間を務めることになる。ミサヲは、鬱憤を、与えられた仕事（教職）に専念することによって晴らしていった。また、女教員会の活動にも専念する。年月は不明だが、中頸城郡女教員会を創設して自ら会長の職に就いている。

ミサヲの教職時代におけるこの女教員会の活動が、後日の高田養護学校創設運動において、寄付金の一翼を担う上越女教員会の活動へとつながったものと考えられる。

退職してからも女教員会との関係は続き、昭和47（1972）上越退職女教師会会長に就任、また、その後、新潟県の同会会長、全国の同会副会長等を歴任するなど、女教員としての活躍をも忘れてはならない。

### 5. 2 婦人会での活躍

#### 5. 2. 1 集落の婦人会の立ち上げ

戦後の混乱期、徳山ミサヲは、持ち前の気性から「戦後の混乱は婦人の手で立て直そう」という願いをもって、婦人会の運動に飛び込んだ。昭和22年（1947）、まず、己が集落に婦人会を組織する。そして、集落から村へ、村から町へ、町から郡へ、郡から市へ、市から上越地区へ、上越地区から県へと活動を拡大していく。ミサヲは、その活動の中で県連合婦人連盟副会長、全国婦人連盟副理事長等を勤めている。この婦人会の活動は、その後、教職生活とほぼ同じ時間を費やすことになった。

#### 5. 2. 2 上越婦人会館の設立運動

ミサヲが、連合婦人会の組織力を駆使しながら、高田養護学校の創設運動を展開したことはすでに述べた。実は、この運動にはお手本があったのである。それは、これから述べる上越婦人会館設立の運動である。高田養護学校創立五周年記念誌（1972）には、「かつて上越婦人会館を建てた経験をもとに動いていった」と記されているが、その具体的な中身は不明であった。今般、上越婦人会館の「十周年記念誌」（1971）の調査で、その中身が具体的に分かったのでここに紹介する。

昭和30年代、新潟県の婦人会運動は年とともに拡大・充実していった。しかし、そんな中、各地区の連合婦人会は、拠り所となる集会所等の拠点地の確保に大変苦勞していた。特に中頸城郡連合婦人会は広い地域に渡り、南は妙高高原から北は米山山麓の柿崎地区に広がる農山村・漁村地で、会員も1万1千人を擁する大所帯であり、中心地のないことに困り果てていた。上越婦人会館の「十周年記念誌」による会員の回顧によれば、「高田の学校をお借りする事も出来ず役員会は会長宅や旅館の一室をお借りする有様で代議員会は東洋館や品川食堂の二階を又実践発表会は直江津の山崎屋旅館や高田商工会議所や銀行のホールをお借りして開きましたのでその度毎自分達の道場がほしいと思って居りました」とある。また、昭和34年（1959）、新潟に初めて婦人会館が出来たことにも刺激されて、上・中越地区にも同じ会館を建設したいという気運が一気に盛り上がっていた。

このような気運の中、中・下越に先駆けて昭和31年（1956）上越婦人協議会を結成していたミサヲらは、この組織を中心に研修道場や憩いの場としての婦人会館の建設を真剣に考えるようになった。昭和34年（1959）11月に上越婦人会館建設準備委員会を設立し、ミサヲが委員長となって運動を展開することとなった。しかし、この運動は、熾烈

を極めることとなった。

まず、建設地や建設資金の問題であるが、色々な手が考えられた。市町村や県への陳情と補助金の申請、地元名士への特別寄付金の依頼、上京して上越出身名士への寄付金の依頼、会員からの自己資金調達等々である。2か年の集中的な運動の中で、苦労の末に資金も徐々に集まり、建設地は高田電報電話局の移転跡地に決定した。

この運動で、自己資金集めに取られた手法が、婦人会員全員から一人100円（又は米一升）を集めたことである。高田養護学校開設運動の手法である米一升運動は、この時すでに試みられているのである。

上越婦人会館の「十周年記念誌」（1971）に寄稿したミサヲによれば、彼女らは建設地の選定に歩き回りながら、同時に資金集めを行ったようである。その時の困難について、幾つかの事例をあげながら回顧している。それは、水野喜代（高田連合婦人会長）と上京して、日夜風雨をいわず上越出身の名士を再三訪ねて寄付をお願いしたが、「私達はもう上越と無関係ですから…」と断られて涙したこと、建設地の位置のことで会員に反旗を翻されたり寄付金を拒否されたりして難航したこと等である。

しかし、苦労の甲斐あって、なんとか上越婦人会館第一期工事へと漕ぎ着けた。総工費2,054万円であったが、その資金の主な内訳は以下のとおりである。

・上越婦人会員	870万円（100円又は米一升による寄付金）		
・一般寄付	56万円	・県費補助	300万円
・高田市	300万円	・上越市町村	200万円
・県市町村会	50万円	・銀行借入金	250万円

その後、第二期工事、第三期工事と建設を進めることとなるが、ミサヲらの粘り強い運動が引き続き行われ、上越婦人会は充実していった。

ミサヲは、昭和36年（1961）6月17日の上越婦人会館落成式の式辞で、「夢か奇蹟か遂に無から有を生じたのである。白亜の殿堂上越婦人会館の偉容を眺める私の眼から感極まつの涙がとめどなく涌くのであった」と述べたとある。また、その喜びを以下のように和歌に詠んだと、上越婦人会館創立30周年（1991）の記念誌で紹介している。

「しとどなる涙堰き得ず命かけ 願ひし女（をみな）の館建ちけり」

また、その時の心境を、十周年記念誌（1971）では次のように和歌で紹介している。「然りあえば手綱は強し女らの 念（おも）い遂げけりこれやこの家」

平成3年（1991）93歳にもなった徳山は、「上越婦人会館創立30周年」の記念誌に「上越婦人会館創立の思い出」と題して寄稿し、「然り合えば女（をみな）の力は強かりき 館は今もかくぞ栄ゆる」の歌を添えて、婦人会館の存続と繁栄を喜んでいる。

いずれにしても、この上越婦人会館設立運動における信念や勇敢な行動、そしてその成果が、先に述べた高田養護学校設立運動の大きな手本となっていたのである。

### 5. 3 社会教育・福祉の充実に関する活動

徳山ミサヲが関係した連合婦人会による上越婦人会館建設運動や高田養護学校創設運動等について述べてきたが、持ち前の骨身を惜しまない社会教育・福祉的活動も多々ある。

前述したように、ミサヲの生家である西念寺は、昭和15年（1940）の落雷によって本堂が焼失してしまった。折しも、日本が戦争に突き進んでいて、物資不足の中での本堂の再建はとてつもない難事業であった。そこでミサヲは、昭和17年（1942）、不本意ながら教職を退かなければならなくなり、夫とともに本堂の再建に奔走することとなった。

1年後の昭和18年（1943）、本堂は合掌造りで、ようやく基礎部分と柱、瓦屋根だけの荒工事が済んだ。未完成であったが、この年、徳山夫婦は本堂を開放し、中頸城郡のトップを切って「農繁期季節託児所」を開設した。昭和19年（1944）、季節託児所を改めて通年制の私立西念寺保育所を開設した。公的補助金無し、保育料無料という私財を投げ出しの夫婦二人三脚の奉仕活動であった。

昭和37年（1962）、町立に移管するまでの19年間、全く奉仕的な経営がなされた。戦中から戦後にかけての食糧難は目を覆うものがあつたが、そんな中、ミサヲは住職（夫秀雄）と協力し、お布施全てを注ぎ込み、正に身を削るような努力で経営を続けた。歌集「来し方」によれば、「配給の砂糖で飴を練り、僅かながらも貰った甘藷を茹でて呉れるのが住職の役、布団を米にかえて小さなお握りをつくり乏しい醤油を一滴宛たらし…」とあり、当時の苦労が偲ばれる。

また、社会教育の面では、県の社会教育講師団の一員となり、婦人の地位向上のために全県各地で講演活動を行った。新潟県社会教育課の社会教育主事の南雲氏らと、重いナトコ（16ミリ映写機）を担いで山間僻地を巡り、意欲的



に啓発活動を続けたという。

ミサヲの社会教育・福祉的活動はこの外たくさんあるが、60歳後半から70歳になってもその意志は衰えず、にしき学園の設立や県立移管運動、上越ミニコロニー誘致運動、特別養護老人ホーム「いなほ園」の運営委員、難病と闘う柏崎療養所のボランティア活動等々、正に枚挙にいとまがない。それらは全て「手草鞋」「手弁当」であった。

#### 5. 4 歌人としての活動

徳山ミサヲを理解する上で、彼女の趣味とした和歌を除いては語れない。幼少のころから百人一首や貝合わせの恋歌に親しんだが、その後に発揮される和歌の腕前には師匠がいたわけではない。長男文秀氏の話によれば、長岡女子師範学校時代に国文の先生に恵まれ、それを契機に腕を磨いたようだという。

「北潮（ほくちょう）」（昭和23年発刊）という上越の同人短歌誌（月刊）があるが、ミサヲはその創立以来実名で投稿してきた。途中中断したが、再び「歌川衣子（きぬこ）」の名で投稿を続けた。そのペンネームには、「衣をきながらの歌」という単純な意味合いが含まれていると語っている。

ミサヲは生涯に渡ってたくさんの和歌を詠んだが、その総数ははっきりしない。それは、本堂の焼失等で多数が失われてしまったからである。高田養護学校の周年記念誌や学校だより、後援会会報、中村憲三の「おまん先生放浪記」等に若干の和歌は紹介されているが、歌集という形で残っている「来し方」が唯一の手掛かりであるといっている。歌集「来し方」は、ミサヲが喜寿を迎えるに当たって、長男文秀、二男昭秀、三男義秀の3人の子どもが、お祝いにとまとめ上げたものである。

この歌集には、和歌612首が収められている。18のカテゴリーに整理されているが、最も多いのが「17 旅情」の210首である。夫を偲ぶ歌「7 挽歌慕情」は58首と2番目に多い。高田養護学校創設運動に関しては、直接のきっかけとなった孫について、ミサヲが自分の運命を詠んだ「5 宿業」が38首、孫とともに入園した「はまぐみ母子園」の生活を詠んだ「4 はまぐみ日記」が50首、学校創設で戦った「8 捨身の願ひ」が9首である。歌集「来し方」に掲載されていないが、高田養護学校創立五周年記念誌（1972）によれば、初代校長中村憲三が寄せた「生みの楽しさ」に、ミサヲが開校式当日にその感激を詠んだという下記の和歌が紹介されている。

「殿堂はついに成りけり喜びの 極みの涙に光る柏楊」（前出）

歌集「来し方」の発刊後、ミサヲは折に触れて詠んだ和歌を整理していた。できれば、歌集「来し方」の第2集に相当するものの刊行をもと考えていたようであるが、それが途中で頓挫してしまった。長男文秀氏によれば、高齢になり歌の推敲が紆余曲折し、うまく進まなかったからのようである。そして、それらの原稿も今は散逸してしまったという。

和歌についてミサヲは、歌集「来し方」の序文で次のように述べている。「私には作歌で正式に師事した先生はありません。その時々心を文字数に合わせて表現しているに過ぎません。数は多いけれど名歌も絶詠ありません。しかし人の心を打つものは吾が心であり短歌は吾が心の表現以外の何ものでもないと信じております」

今日、歌人としても高い評価が与えられるべきと思うミサヲの和歌について、その続編が日の目を見なかったのは返す返すも残念である。

#### 5. 5 琴、謡曲

徳山ミサヲの趣味は、和歌に限らず多彩であった。歌集「来し方」によれば、晩年、「…経を誦み、謡をうたい、歌を作り、降れば縫い、晴るれば掃き…」とあるが、謡曲にも力を入れていたようである。

溯るが、長男文秀氏によれば、ミサヲは教職時代お琴を習っていた。師匠は同郷の盲人で、週一回は出稽古に来てくれた。練習場所は本堂横の小座敷で、「六段」や「千鳥」のメロディーが流れていたという。文秀氏は、いつしかそのメロディーを空んずるほどになったというが、時折、琴の爪をはめてもらって「さくら・さくら」の弾き方を習ったという。しかし、この琴は、昭和15年（1940）暮の本堂への落雷で焼失し、以来、ミサヲと琴の縁はぷつりと切れたという。本堂再建に全てをなげうったため、琴を振り返ることができなかったようである。

謡曲は、昭和20年代の半ばころから高田市内在住の植木小糸氏について観世流を学び、やがて高田観世九皐会に所属し、後年は観世宗家の喜之氏に師事して奥伝を伝授されるまでになった。自ら同好の後進を指導して「一操会」を立ち上げた。また、大潟観世同好会を結成するなど、その活動は晩年まで続いた。



## 6 後世の人から見た徳山ミサヲ

### 6. 1 初代校長中村憲三からみた徳山ミサヲ

徳山ミサヲと中村憲三との出逢いは、実は新潟ホテルのロビーが最初ではなかった。中村が直江津高校に勤めていたころ、ミサヲが北信越高校弁論大会の審査員をしていたのが付き合いの始まりである。

その後、学校開設運動での付き合いや、孫が高田養護学校に入学したこともあって、ミサヲは中村校長が勤める学校への協力は惜しなかった。開設当初から長年に亘り後援会副会長を、また、70歳過ぎた昭和46年（1971）から昭和48年（1973）の3年間、PTA会長も引き受けている。

中村は、ミサヲの最初の印象やその後の活躍の様子を、「学校だよりNo36」（1970）や「おまん先生放浪記」（1976）の「万年美人のおばあちゃん」で次のように絶賛している。

「彼女、おばあちゃんは、今、73歳。誠に上品、清潔、薄化粧をした美人であり、奉仕精神に燃えた信念と実践家で、まさに優雅な女傑というべきであろう」「…いわば小生は子どもに当たる年齢であるが、…あの年になったとき、いつまでもあれだけの指導性、実行力、奉仕の心を持ち合わせているだろうか。会うごとに優しさの陰にかくれているしんの強さに頭が下がるのである」「…誠に勇敢かつ情熱的であった。…その熱意と勇氣に打たれた」「すでに中央より叙勲され（表1参照）、その功績はひとしく認められているが、この良きリーダーをいつまでも美しく、若く、そして全婦人のシンボルとして、健康であって欲しいと願うものである」（昭45.10.9記）

### 6. 2 婦人会関係者からみた徳山ミサヲ

徳山ミサヲは、上越婦人会館の創設を始めとし、婦人会での多くの活動の中でたくさんの知己を得た。会館創設活動中は「ハイヒールの有閑マダム達の遊び場さ」などと揶揄されるが、一緒に活動した婦人たちからは、先頭に立っての執念の活動に敬服の言葉が多く述べられている。

上越婦人会館「十周年記念誌」（1971）で、塚野は「…徳山主任理事をはじめとする皆さんが、いかに有能であり、努力家であり、更にチームワークを重んじてこられた…」と、和栗は「委員長徳山さんの、いつも先頭に立っての御活躍をはじめとして、…時には意見の食い違いもありましたが、常にみんなが和を欠くことなく、スムーズに会館建設への道を進められた…」と述べている。

上越婦人会館「創立30周年」の記念誌（1991）で、加藤キヨイは「…徳山先生は、本年92歳の長寿を迎えられ矍鑠としていわれる言葉に『おいしい井戸の水を飲むにつけ、その井戸を掘り上げた方々のご苦勞を忘れないように』という感謝の心を持って、代々の役員や職員の皆さんに脈々と受け継がれて今日の隆盛をみることができ、…」と述べている。

ミサヲが、常に先頭に立つという強いリーダーシップを発揮しながら、その考えを多くの人に感化し、しかも「和」を大切にしながら運動に取り組んだ様子がうかがえる。

### 6. 3 長男文秀氏からみた母（平成19年9月9日、丸山・小杉によるインタビューから）

#### 6. 3. 1 長男から見た母徳山ミサヲの印象

とにかく、学校の先生として一生懸命でひたむきだった。世間でいう母親の愛情に甘たれてまわりつくということはほとんどなかった。それはしかたのないことで、明るくなれば学校に行って暗くなって帰ってくる。作文、答案など、夜なべをしている。だから、私は、むしろおばあちゃん子として育った。

母は、一つ方向を決めると邁進する。それが良さであると同時に、時には人に疎まれたり誤解を受けたりする。高田養護学校の創立運動でも、そんなことがうかがえる。しかし、あれだけ多くの支持者・賛同者が集結できたのは、強い意志と行動力もさることながら、やはり母の「人徳」というべきかと思う。

#### 6. 3. 2 障害のある孫（秀顕）の受け入れ

昭和31年（1956）8月27日、重度の障害で生まれてきた秀顕に、私自身が呆然となってしまった。脳性まひという診断はすぐ出たのではなく、生まれかたがおかしかったといわれた。分娩室に入ったがなかなか出てこず、生まれるまでに時間がかかった。その時、私は三条出張中だったが、一電車でも速く帰って来ようと連絡が入った。

遅く病院に駆けつけたとき、生まれてはいたが、両手両足の四肢が完全に硬直していた。仮死状態が続き、ようやく呼吸こそ始めたがけいれんが続き、これで生きられるのかと思った。私はこの予期せぬ状態に仰天してしまって、ストレートに「自分の子どもが出来た」という感じではなく、「大変な事態になった」ということばかりが先に立った。そんな状態だったから、父も母も同じように大変な戸惑いの状態であった。

昭和32年（1957）春、秀顕は、年端もいかない子どもであるのに、股関節脱臼治療のため聖路加国際病院の小児科

病棟に入院した。同病院には、秀顕の母親と高校同級生の看護師さんがいて、仕事を離れた立場で時々様子を見に来てくれ、親切にしてもらった。しかし、子どもの付き添いで上京していた秀顕の母親が、入院中の子どもを残して、ある日、突然に失踪するという非常事態が発生した。失踪の理由も意図も全く不可解な出来事だったので、家族一同は途方にくれる状態であった。

その年の暮れに病院でアパレート（装身具）を付けてもらって退院したが、秀顕の母がいらないので、私と母（ミサヲ）が一緒に連れて帰ってきた。その時に「この子はやっぱり私（ミサヲ）が育てなければならない」という気持ちを強くしたのでないかと思う。

その当時は、今よりも障害者に対する一種の偏見差別意識が強く、いろいろな差別用語が横行していた。それが自分の身の上に起きたという、何ともいえない気持ちだった。自分で納得できない期間があった。時代的にいっても、障害のある子どもは白い目で見られたり阻害されたりすることがあったわけだから、「大変なことになってしまった」という気持ちだった。私の父も母も同じ気持ちだったと思う。しかし、父は母を随分慰めていた。「この事実を引きずるしかないんだ」と強く説得していた。父は、私にとって怖い存在だったのだが、「父を泣かせてしまったなあ」という気持ちだった。

### 6. 3. 3 母の第一の試練

私は、母の人生には大きな試練が四つあったと考えている。以下、その「試練」に触れながら母の裏面を探ってみたい。

第一の試練は、大正6年（1917）、母が教師として歩み始めたその年の10月3日に父（義諦）が56歳で死亡し、翌大正7年（1918）9月15日に兄（普行）が24歳で死亡したことである。兄は、この年に慶応大学経済学部を卒業し、日本銀行本店に就職したばかりだったが、肺結核を発病し父の後を追ってしまった。そのため、高等女子師範学校への進学の実夢も、行く末を誓った相思の男性（兄の学友）との将来も、すべて思い切るほかに選択肢はなかった。一旦、家出までして初志を貫きたかった程であったが、結局は家督を継ぐため、身を切るような苦悩の末に小学校教育に全力を注ぐ決意を固めたようだ。

### 6. 3. 4 母の第二の試練

第二の試練は、昭和15年（1940）12月13日、突然の落雷によって西念寺本堂が焼失したことに端を発する。住職（夫）はその再建に奔走するのだが、母は自分が教員をしたまま夫の手伝いをすることは不可能だと覚った。惜しい思い切りだったと思うのだが、25年間勤めた教員を辞めざるを得ないと覚悟を決めたのだと思う。当時は戦争中であり、本堂を建て直すという難工事だったわけで、夫一人ではどうにもならないと思ったのだろう。そのことを、母はよく話してくれた。だから、教員退職の一番の理由は本堂の火災である。

教員は25年も勤めると上席教員になる。当時の田中好治校長に、「中頸城郡の女教員ではトップなんだから、やがて教頭、校長へのレールが敷かれている」と言われた矢先に火災にぶつかったので、余計に退職することへの無念さがあったと思う。

第二の試練をまとめると、お御堂が焼失し、その再建に夫と遮二無二取り組んだこととか、時代は戦争で、長男の私（文秀）が京都大谷大学在学中に学徒出陣で東部第56部隊に入隊、二男（昭秀）が海軍兵学校を卒業して巡洋艦西郷に乗艦と、二男を戦場に送ったこととか、また、母（初見）の老衰が進み、5年余にわたり看病に難渋したことなどである。更に、戦中戦後の約20年間、保育園を開設して、全く無償の奉仕活動が続けた苦労も大きかった。

この試練を、父（秀雄）と母（ミサヲ）の深い信頼関係で乗り切ったように思う。寺の跡継ぎになってくれれば誰でもいいと、写真さえ見ないで覚悟を決めて一緒になった母だが、父との気持ちは通じ合い、相手の良さが分かっていたのだろう。父は、私にとってすごい親父だったと思う。頭の切れる人で頑固だったが、反面、非常に包容力があって人から信頼されていた。母もそういう人柄に惚れていたのではないか。昭和39年（1964）1月15日に父が亡くなる（69歳）のだが、最愛の伴侶を亡くした悲しみは強かったようで、父への挽歌（偲び歌）を150首も詠んでいる（歌集「来し方」には58首掲載されている）。

### 6. 3. 5 母の第三の試練

第三の試練は、先にも話したが、障害を負った初孫（秀顕）の誕生と彼と一緒にのはまぐみ母子入園である。昭和33年（1958）、母はここで随分辛い思いをしたようだ。私は中学校の教員をしていたので、勤務が終わってから、交通不便な時代だったのでバイクで新潟を往復した。秀顕は、まず言語教育を主目的としていた。しかし、はまぐみに入っている子はいろんな障害を抱えていた。歩けない子ども、手が動かない子ども、知的に遅れている子ども等々みんな一緒であった。そんな中、母は「自分が行くしかない」、そして「この子の親代わりになろう」と決意を固めたようだ。この時の気持ちは、歌集「来し方」によく出ている。

私も、はまぐみでやっていることを見た。可哀想に思ったのは、言葉になる前の音を出させているのだが、いつま

でたっても五十音図に合格の○が増えないことだった。この頃、新潟大学で「回復不可能な重度の障害」と診断された。生まれた産婦人科では障害名等は明らかでなかったが、初めて「脳性まひ」と診断されたのである。その後、はまぐみの入園は1年足らずで終了した。

昭和34年（1959）退園してからは、住み込みで子守をしてくれた娘（細谷スミ子）さんの優しくて献身的な努力で、ようやく遅い歩みを始めるようになった。不明瞭ながら、短い単語の発音が少しずつ出来るようになってきたのである。その後の秀顕たちへの就学猶予・免除のことや、高田養護学校創立運動、4年生への入学のことはご存じのとおりである。

母は、連合婦人会の仕事、上越婦人会館の創立運動、高田養護学校の創立運動、にしき学園の県立移管の仕事と、まあ、とにかく家を空けて飛び出していた。私も勤めていたので、母がいつ出掛けていつ帰ってくるのか分からない状況だった。とにかく、よくもこれだけ家を空けられるものだなあ、よくも父が我慢できるものだなあと思った。やっぱり、夫婦の理解と信頼がなければできないことであった。

高田養護学校の創立運動の時、よく県庁を訪れたようだが、和服と下駄という出で立ちだったので、古い県庁の廊下を下駄の音を立てて入っていくと、「ほら、また高田のうるさいばあさんがきたぞ!」と話題となっていたようだ。中村憲三先生とは、創立運動時代から、後援会副会長時代、PTA会長時代、そして退職してからもずっと関わりを持たせていただいていたが、先生は母のことを「お袋さん」と呼んでおり、本当に意気投合していたようだ。

母の残した仕事は、婦人会館の建設、養護学校の創立という物造りの面で語られることが多いが、むしろその内面にある「戦後社会における婦人の地位の向上、確立」とか、「当時の社会に根深く存在した障害者への差別意識に対する啓発」といった精神的な面での活動を見逃してはならないと思う。

母の第三の試練は、孫（秀顕）が高田養護学校の4年生として、昭和43年（1968）5月に入学したことで一応の終息を見ることとなった。その後、中学部まで6年間の教育を受け、卒業して就職することとなる（この時の様子や喜びを、学校だより90号昭和49年（1974）5月「この子を見つめて」で、前PTA会長徳山ミサヲの寄稿として、「作業衣を折目正しく身に付けて 子は就職の初日をいそぐ」外3首の和歌を紹介している）。

### 6. 3. 6 母の趣味

和歌を作ることは、母が一生を通して一生懸命取り組んだ趣味である。曾祖母（ミワ）も祖母（初見）も、当時としては教養があつて環境に恵まれていたのがよかったようだ。また、長岡師範で、国文の先生が歌について個人指導・添削をしてくれて、この先生のお陰で歌の作り方の基礎を教え込まれたと言っている。その頃から文芸雑誌に投稿するようになった。上越の同人誌「北潮」（月刊、昭和23年創刊）にも、歌川衣子というペンネームで投稿した。この雑誌は、知命堂病院の事務長をしていた野村さん（高田養護学校開設当時の寄宿舎職員野村（現小菅）はづみの父）が主管していた。

母は多くの和歌を詠んだ。我がお袋ながら、これだけの感覚と表現力に驚いている。創作した和歌の総数は不明である。女子師範時代に和歌の世界に入ってから昭和15年までのものが、火災で全部焼失してしまった。相当なボリュームだったと思う。歌集「来し方」に載せたのは、残った歌稿の五分の一くらいかと思う。この「来し方」の続編に相当するものの刊行を考えていたが、推敲に時間が掛かり、高齢になって立ち消えになってしまった。今思えば、強引に刊行した方がよかったと残念でたまらない。

琴は、火災で本堂が燃えるまでであるから、私が小学校に行く前からのことである。1対1で個人指導を受けていた。そのうち火災に遭い、本堂工事と寺再建、また、婦人会等々で忙しくなると、琴はできなくなってしまった。

謡曲は、本格的に始めたのが昭和20年代半ばではなかったかと思う。観世流で、最晩年まで続いた。奥伝まで終わったと言っていたので、免許皆伝までいったわけだ。「一操会」という同好会を立ち上げて、それを40年余り続けた。

### 6. 3. 7 母の第四の試練

これは、母の老境の悲哀といってもいいものである。

母は、昭和44年（1969）11月3日、勲五等瑞宝章の叙勲の榮譽を受けるが、これを機に一切の公職を辞して後進に道を委ねる決意をしたようだ。思いもしない皇居まで行ったということで、ここが自分の仕事の仕納めだと思ったのだろう。そこで、今まで自分の取り組んでいたことを、引退する部分は引退する、後を継いでくれる人に後を任せるというような形で整理を始めた。

母の受賞については、この外にもいろいろとあるが（表2）、額に入れて飾ってもいいような状態にあるものは25点位である。

私は、昭和49年（1974）に、定年まで10年近くを残して中学校教員を退職した。母は、これで長年にわたって手伝ってきた寺の仕事（法務）からやっと解放されると思ったかも知れない。しかし、私は、請われるままに大潟町の



公民館長、町の教育長と10年あまり歴任し、挙げ句の果ては町長選挙にまで引き出されることになった（これは幸いにも落選したが…）。また、僧職として本山の要職に就いており、なかなか引退できないでいた。結局、母は、米寿のころまで法務の片棒を担ぎ続け、檀家さん参りは1日10軒以上に及んだ。

母は、老境に入ったとはいえ、退職女教員会との関わりは続いたし、川室道隆先生が創設された特別養護老人ホームいなほ園の理事としても参加していた。ミニコロニーに関わることもあった。柏崎養護学校の筋ジスの子どもたちへの関わりは、寺の奥さんたちに呼び掛けて慰問を兼ねてお手伝いをということだった。柏崎のキリスト教会の牧師さんがやっていた仕事だと思うのだが、東南アジアの難民の引き受けをやっていたところに物資を運んで行ったりもしていた。

90歳を過ぎた頃から、母の身边は次第に寂しさの色が濃くなっていった。

「残された力を人々のために尽くそう」という想いで発足した当時の退職女教師の会の同志たちも、高齢となり相次いで世を去っていった。また、上越婦人会館・高田養護学校の創建に手を取り合った婦人会のOBたちも、櫛の歯の欠けるように逝ってしまい、往事を語り合う者も皆無になった。

加えて、いままで一つ屋根の下で賑やかに生活していた孫夫婦家族が、事情があって別居することとなり、母と長男（文秀）と孫（秀顕）の三人だけの「老々介護・障老介護」の家族環境に急変してしまった。

母は、終生の趣味であった和歌と謡曲に心を慰め、体調のよいときには外へ出て広い境内の草をむしったり、身の衣類の繕い物に打ち込んだりなど、まさに「晴耕雨読」ならぬ「晴掃雨縫」の生活を続けた。

こんな状況の中で、母の憔悴した心を慰め老衰した肉体を労ってくれた婦人（土方節子氏）がいた。同氏は戦時中に東京から高田の女学校に疎開していたが、ある時期、故あって西念寺に寄留したことがあり、母に可愛がられていた。それから60年も経て、母の難渋を聞き付けて介護に駆け付けてくれた。「若いうちに母親を亡くしたので、実の母に尽くすつもりで…」の言葉通り、親切な介護に母はどれほど心を癒されたことか。老母と娘のような日暮らしが、母の最期まで十年近くも続いた。母の言う「仏恩」はここにもあったのである。

平成8年（1996）数え年99歳、白寿の祝いには、寺の門徒さんなど大勢が集まってくれ、200人近い方々にささやかな記念品を贈った。平成10年（1998）2月9日、満百歳の誕生日には、県知事さんの祝詞の伝達や町長さんの表敬訪問を受けた。

ともあれ、「孤老とはかくも淋しきものか」と述懐するような生活の中で、母の信仰心はますます深まっていったようである。事あるごとに本堂の仏前に座して合掌する姿が目立つようになった。「苦難に耐えて強く生き抜くにはお念仏しかないぞ」と父はよく母に語っていたという。それが、死別して四十年を経ても母を支えていたのだと思う。

「念仏とは命よろこぶ歌ごゑと となえまゐらす南無阿弥陀仏」（95歳遺稿）

「手を握る友一人なき百年（ももとせ）の わが終焉の静かなるかも」（99歳遺稿）

「百歳の齢（よわい）豊にいただきぬ 優しさ充（み）てり南無阿弥陀仏（100歳遺稿）」

### 6. 3. 8 母の最期

母は年とともに衰えていったが、平成11年（1999）3月3日、川室記念病院に入院した。母は、最初は、「自分はこの寺で生まれて100年経った。自分の家の畳の上で死ぬ」と頑なに拒否した。しかし、医師から強く勧められて入院した。妹（寿）が毎日のように見舞ってくれた。約2年間お世話になったが、平成13年（2001）3月16日、同病院にて満103歳と1ヶ月の命を閉じた。かすかに「アリガト」とつぶやいて、静かな大往生だった。

臨終には孫娘（裕子）、三男義秀の妻（やよい）、最晩年の約10年間、献身的に介護を尽くしてくれた土方節子さん（戦争中に我が家に疎開してきていた旧知の女性）が立ち合った。長男の私（文秀）は、容態の急変を聞いて駆け付けたが間に合わず、残念だった。

母は、生前、「達者に産んでもらい、多少でも人様の役に立つ仕事のできる力を与えてくれた両親に感謝する」と口癖であった。「健康な体と多少の才能を与えてくれた両親に感謝…。これは皆仏様のお陰…。つきつめればすべて仏恩なのだ」。私の心に残る母の最後の言葉である。母の一生を貫いた感謝の気持ちと、親不孝をしたなという後悔の気持ちが混じり合ってそこにあるように思う。

## 7 新潟県の特別支援学校開学運動における徳山ミサヲの功績

### 7. 1 新潟県において特別支援学校開学に貢献した人々

#### 7. 1. 1 高田盲学校の開学に貢献した大森隆碩

高田の眼科医であった大森隆碩は、明治19年（1886）自らが目を患って失明の危機に陥ったが、それを契機に盲人

教育の重要性を痛感した。そこで、同じ眼科医や有志を集めて、明治19年11月5日「訓盲談話会」を組織し、私塾的な盲人教育を開始した。これが後の高田盲学校へと継承されていくことになる。その後、会名を「盲人矯風研技会」と改め（1887）、高田の光樹寺を学校代わりとして盲人を募集し、鍼灸、琴などの教育を組織的に始めた。

大森らは、明治22年（1889）「私立訓蒙学校設立願」を新潟県に提出したがなかなか認められなかった。その後再三提出を繰り返し、苦労の末、ようやく明治24年（1891）に新潟県知事の正式認可を得て、「盲人矯風研技会」を改めた「私立訓蒙学校」を設立することができた。このときの「私立訓蒙学校設立願」には、「…心事未ダ必ズシモ盲セズ（視覚は機能しなくなったけれども、心の中まで見えなくなり、なにも分からない状態になっているわけではないのだ）…」と、盲人教育の真髄を述べている。

「私立訓蒙学校」のその後の経営は、財政的には先進的な盲人教育を行う上でも困難を極めた。しかし、大森は自らが財政を支えると同時に、中央で活躍している郷里出身の小西信八らの協力を得て、その後も充実を図っていったのである。

### 7. 1. 2 長岡聾学校の開学に貢献した金子徳十郎

長岡で薪炭商を営み、長岡町会議員としても活躍していた金子徳十郎は、明治24年（1891）に誕生し、3歳で中耳炎を患って聾啞（当時の記述）となった長男の行く末を案じていた。聾啞でも出来る職業を考え、知人と相談しているうち、東京盲啞学校の入学を勧められ、決意することにした。

金子は明治37年（1904）3月、我が子を入学させるべく上京したが、当時、東京盲啞学校の校長をしていた郷里出身の小西信八に、新潟県出身の在校生が3番目に多いことを触れられ、「新潟県の中樞の地、長岡にこそ盲啞学校が必要だ」と説かれた。更に、その設立運動の先頭に立つのに金子が最も相応しいと熱心に勧められた。

金子は帰郷すると「自分の子一人だけでなく他の子にも教育を」と、早速「長岡盲啞学校設立」のために動きだし、まず、時の町長秋庭半にその必要性を説き、賛同を得た。町長から、経費や生徒数など、学校開設の具体的な計画について調査を依頼された金子は、苦勞して該当者を把握するとともに、カリキュラムや授業料等の積算も行った。また、学校設立のために知人たちから多くの資金を募るとともに、未だ理解の進まない盲啞教育について、郷里出身の東京盲啞学校在校生や小西校長らを招聘し、その必要性を認識してもらった。

金子の熱心な設立運動と関係者の協力を得て、明治38年（1905）年3月10日「私立長岡盲啞学校」が創設され、4月15日から授業が開始された。運動を起こしてわずか1年という短期間のうちに学校設立を成し遂げたわけで、金子の活動や地域の人々の協力は驚嘆に値する。

### 7. 1. 3 柏崎養護学校の開学に貢献した教育者療友会

結核は、長年日本の国民病と言われてきたが、戦後もその勢いは直ぐには衰えなかった。国策として日本各地に結核療養所が設置されていたが、一度罹患し発見されると療養所に隔離されること、病状が進むと胸部整形手術があるが生存率50%ということなどから、患者たちの生活は不安で過酷なものであった。

療養所には、あらゆる職業の者が入院していたが、もちろん教師たちも多く入院していた。昭和27年（1952）国立新潟療養所（現柏崎市）の結核患者は750名ほどいたが、教員も40名ほど入院しており、教育者療友会（教員の結核患者の会）を組織していた。教員は、療養が長引くと退職に追い込まれるという不安も抱えており、もっぱら彼らの身分を守る活動を行っていた。

教員の笹川芳三は、昭和27年（1952）1月に新潟療養所に入院し、大変落ち込んでいた。あまり出歩かなかったが、ある晴れた日、気分転換に売店に出かけた。その折、初代の教育者療友会（昭和23年（1948）に組織。以下教療会）会長佐々木毅が、病衣姿の子どもと遊んでいる姿を見て驚いた。また、成人に達しているのに、「坊、坊」と入院した当時のまま呼ばれている患者がいることにも驚いた。療養所に入院した子どもたちが、「教育ゼロ地帯」にいることに愕然としたのである。子どもたちの心もすさんでおり、「ゴミにまじったオモチャのかけら。わたしは生きている死ガイ」などと自分を語る女の子もいた。

笹川らは、「この子どもの教育のために」と、天職としての教師魂を奮い立たせた。そして、極限の中で、学齢療養児のための「学童療養学園」設置運動を教療会会員とともに展開したのである。病院関係者の協力の取り付け、県教職員組合への訴え、対県交渉や国会対策と、次々と活動が続けた。動ける者を中心に活動したが、中には対県交渉に看護婦（現看護師）の介添えで臨んだ者もいた。また、寮に帰ればストマイを打ったり氷を胸に当てたりするなど悲惨な状況にあった。過勞と心勞が続く中、教療会の初代会長佐々木毅が「自ら命を断つ」という事件もあり、正に「命を懸け、血を吐く思い」の教療会の活動が続けられた。

運動の結果、幸いにも病院や行政関係者等の協力を得て、昭和29年（1954）4月3日、療養所の中に療養学童のための学園「新療学園」が誕生した。これはまだ私塾的なものであったが、後に柏崎市立大洲小学校・第三中学校の分校として認められ、柏崎養護学校へと継承されるのである。結核療養児の「教育ゼロ地帯」の解消には、命を削って

まで「新療学園」を立ち上げた教療会の活動があったのである。

## 7. 2 徳山ミサヲの運動の功績

障害児のための学校創設運動には、共通した出発点がある。眼科医の大森隆碩は自らの体験が、薪炭商で町議の金子徳十郎は長男が、教師集団である笹川芳三らの教療会は療養学童が運動のきっかけになっている。いずれも、身近な体験を端緒とし、障害児にも教育をとということである。徳山ミサヲを高田養護学校創設の運動に走らせたきっかけも、身内の孫が障害児だったことによる。しかし、その運動が世間から理解を得、広がりを見せたのは、彼らがそれなりの知識層で社会的地位があり、その上に熱い情熱とねばり強い運動が展開されたからである。また、運動の過程では、地方や中央を問わず彼らを支えた人脈に恵まれたことにもある。

徳山は、教職を退いてから寺を守る仕事に没頭していたが、孫の「ほく行くところないんだ」の嘆きを聞き、恵まれない子に療育機関をと考えた。そして、当時関係していた連合婦人会を土台とし、期成同盟会を組織して運動を展開した。学校創設運動での組織力や人脈の力が、その後の成果に大きな影響力を及ぼしたのは、いずれの開学運動も同様である。徳山は、上越地区の連合婦人会を開学運動に組織することに抜群の手腕を発揮したし、婦人会の役員や中村憲三という人にも恵まれて、開学運動を貫徹することができた。

徳山の年譜や関係者の言から推察すれば、彼女は正に才媛であり女傑であった。奉仕の心があり、信念があり、指導力があり、実行力があつた。和歌を始めとする趣味も多彩であった。この徳山に対して、後世の人は表彰でその功績をたたえている。

## 8 おわりに

徳山ミサヲは103歳の天寿を全うしたが、希望と現実の狭間で揺れ動きながらも、天性の才能を生かし、自分の信念を貫き通すという波乱に富んだ人生を送った。

高田養護学校の創立に関しては、徳山が直接的には婦人会で培った組織力や人脈を駆使し、上越婦人会館創立運動での手法である「米一升運動」を再び行使して、学校の開学に成功した。この成功には、徳山の並々ならぬ自己犠牲の精神（捨身の願い）、ねばり強さ（執念）があつたと同時に、支援してくれる人との出会い（徳山は仏恩という）に恵まれたことにもあつた。高田養護学校は、換言すれば「婦人会が創った学校」である。

新潟県の特別支援学校開学運動における徳山の功績は、誠に偉大なものと評価される必要がある。高田盲学校開学に貢献した大森隆碩、長岡聾学校開学に貢献した金子徳十郎、柏崎養護学校の開学に貢献した笹川芳三ら教療会の功績に匹敵するものである。

開学運動に限らず、徳山から学ぶべき事柄は大変多い。歌集「来し方」では、「私は常に『時』と『力』と『物』の余りがあつたらそれを待っている人達に惜しみなく捧げるべきだ」という信念を持ち続けていましたので…」と、人としての在り方についてもその信念を述べている。

徳山は、講演や寄稿で次のような中国の故事をよく引用した。それは、「飲水不忘掘井人（おいしい井戸の水を飲むにつけ、その井戸を掘り上げた人々の苦労を忘れてはならない）」である。近年、特別支援学校への理解も少しずつ浸透してきているが、特別支援教育に携わる関係者（保護者、教師、行政関係者等）は、井戸を掘り上げた徳山の功績を忘れてはならない。

## 謝 辞

本稿の執筆に当たり、上越婦人会館事務長須藤和子氏、西念寺住職徳山文秀氏から多大なるご協力を戴きましたこと、深く感謝申し上げます。

徳山ミサヲ氏の長男である文秀氏には、家庭上の個人情報に触れる部分も多々ありましたが、快くインタビューに応じて戴きまして、重ねて感謝申し上げます。静かな語り口の中で、高い教養に裏打ちされた冷静な観察眼に、頭の下がる思いが致しました。

お陰様で、高田養護学校開学に尽力された徳山ミサヲ氏の熱い思いやその運動の手法、人となり等を明らかにすることができました。特別支援教育に携わる関係者とともに、徳山ミサヲ氏の功績を末永く語り継ぐことをお約束致します。



## 【資料】

表1 徳山ミサヲ 年譜

年 月	事 柄
明治31年 (1898) 2. 9	新潟県中頸城郡潟町村（現上越市大潟区）大字潟町西念寺に出生
大正 6 年 (1917)	新潟県長岡女子師範学校第一部卒業 新潟県小学校教員として北蒲原：乙小学校赴任
大正 6 年 (1917) 10月	父義諦死亡
大正 7 年 (1918) 9 月	兄普行死亡 高等師範学校進学夢潰える
大正11年 (1922) 4 月	夫秀雄と結婚
大正12年 (1923)	長男（文秀）誕生
昭和 2 年 (1927)	二男（昭秀）誕生
昭和15年 (1940)	三男（義秀）誕生
昭和15年 (1940)	落雷により、本堂全焼
昭和16年 (1941)	太平洋戦争勃発（後に、長男、二男出征）
昭和17年 (1942)	本堂再建に着手 本堂再建に全力を尽くすため、断腸の思いで、25年勤続の小学校教員を退職
昭和18年 (1943)	本堂、基礎と瓦屋根だけの荒工事完了 長男、大学在学中に学徒出陣 二男、海軍兵学校卒業後巡洋艦乗船
昭和19年 (1944)	未完成の本堂を開放して「農繁期季節託児所」を開設（中頸城郡内第一号） 季節託児所を改め、通年制の「西念寺保育園」を開設 * 公的補助金無し、保育料無料で全く無償の奉仕活動 ～昭和38年（1963）町立の保育園がスタートするまでの19年間、私立西念寺保育園長
昭和23年 (1948)	潟町村民生委員
昭和27年 (1952)	潟町村教育委員（公選制）
昭和28年 (1953)	中頸城郡連合婦人会長
昭和29年 (1954)	新潟県社会教育講師団
昭和31年 (1956)	上越 4 市 3 郡地域婦人協議会長
昭和31年 (1956)	長男（文秀）に第 1 子（秀顕）＝ミサヲの孫＝誕生（脳性小児まひ） 東京聖路加病院からの退院に伴 その後 肢体不自由施設 新潟県はまぐみ学園での機能訓練に同道することとなる
昭和32年 (1957)	上越精神薄弱児施設にしき学園設立運動
昭和35年 (1960)	新潟県婦人連盟副理事長
昭和35年 (1960)	上越婦人会館建設委員長
昭和36年 (1961)	上越婦人会館理事長
昭和37年 (1962)	新潟県青少年教育振興協議会委員
昭和37年 (1962)	新潟県社会教育委員
昭和37年 (1962)	上越心身障害児療育機関設置期成同盟会長
昭和37年 (1962)	新潟県立高田養護学校設立運動 * 上越一円の婦人会に呼びかけ「米一升運動」を起こす
昭和37年 (1962)	全国婦人連盟副理事長
昭和38年 (1963)	大潟町立保育園開設、園長就任
昭和43年 (1968)	新潟県立高田養護学校開設をみる
昭和43年 (1968)	新潟県社会福祉総合施設（コロニー）建設委員
昭和43年 (1968)	新潟県特別養護老人ホーム建設委員
昭和47年 (1972)	上越退職女教師会会長
昭和48年 (1973)	新潟県社会福祉審議会委員
昭和49年 (1974)	上越特別養護老人ホームいなほ園運営委員
昭和50年 (1975)	上越ミニコロニー設立準備委員会副会長
平成13年 (2001) 3.16	川室記念病院にて逝去（享年103歳）

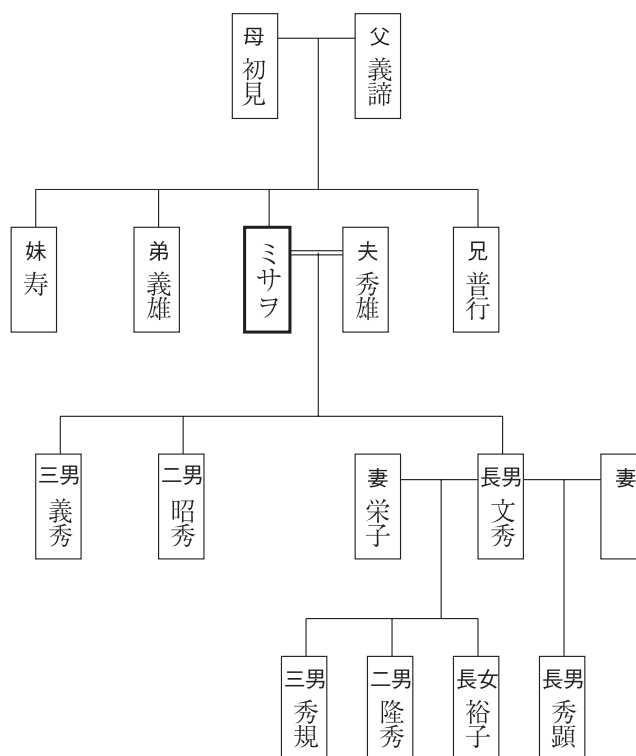
（歌集「来し方」の著者略歴等を元に作成）

表2 徳山ミサヲ 主な受賞歴

年	受 賞 及 び 表 彰
大正6年 (1917)	長岡女子師範学校卒業に際し、新潟県知事賞を受賞
昭和17年 (1942)	教員退職に際し中頸城女教員会より表彰
昭和35年 (1960)	中頸城郡社会福祉協議会より優良保母並びに優良保育園の表彰
昭和37年 (1962)	中頸城郡連合婦人会より15周年記念に際し表彰
昭和37年 (1962)	学制90周年記念の社会教育功労賞（文部大臣）を受賞
昭和44年 (1969)	生存者叙勲として社会教育社会福祉の功労により勲五等瑞宝章を受賞
昭和48年 (1973)	町民功労者として大潟町より表彰
昭和49年 (1973)	精神薄弱児者福祉教育の功労者として、新潟県手をつなぐ育成会より表彰

(この外各種団体や機関の表彰状15件ほどあるも省略)

図1 徳山ミサヲ 家系図



## 【 引用・参考文献 】

- 上越婦人会館 (1971) 上越婦人会館十周年記念誌 上越婦人会館  
 上越婦人会館 (1991) 上越婦人会館創立30周年 (財)新潟県上越婦人会館  
 内外教育編集部 (1982) 不就学学齢児童生徒 内外教育  
 中村憲三 (1970) 学校だよりNo36「ピアノ披露に思う」 新潟県立高田養護学校  
 中村憲三 (1976) おまん先生放浪記 文化印刷株式会社  
 中村憲三 (1979) おまん先生と養護学校 文化印刷株式会社  
 新潟県立高田養護学校 (1974) 創立五周年校舎竣工記念誌 文化印刷株式会社  
 新潟県立高田養護学校 (1977) 創立十周年記念誌 文化印刷株式会社  
 新潟県立高田養護学校 (1987) 創立20周年記念誌「伸びようポプラの子」 文化印刷株式会社  
 新潟県立月ヶ岡養護学校 (1980) 創立15周年記念誌「流れはつねに新しく」 文化印刷株式会社  
 丸山昭生・小杉敏勝編著 (2007) 新潟県における特別支援学校開学に尽くした人々の精神とその歩み 上越教育大学研究紀要 第26巻 399-420  
 丸山昭生・小杉敏勝外 (2007) 教育0の解消～特別支援教育に引き継ぎたい開学の精神～ 北越出版  
 徳山ミサヲ (1974) 学校だよりNo90「この子を見つめて」 新潟県立高田養護学校  
 徳山ミサヲ (1976) 歌集「来し方」 澤田印刷株式会社

# A Study of MISAWO TOKUYAMA, who made effort to establish Takada School for children with intellectual disabilities

Akio MARUYAMA\* and Toshikatsu KOSUGI\*\* and Nagako OKUIZUMI\*\*\*

## ABSTRACT

Takada school for children with intellectual disabilities was established on May 1st 1968. At the time, Niigata prefecture had already Tsukigaoka school for children with intellectual disabilities in Sanjo city, which was set up on September 1st 1965. People made a movement toward the foundation of the school for children with intellectual disabilities in Joetsu area. MISAWO TOKUYAMA, the president of Joetsu Women's Council was playing an important role in that action.

She had a grandchild with cerebral palsy. She made the movement for learning opportunities for him and similar children. She expanded the acts for foundation of the school with Joetsu Women's Council. Finally their dreams came true. There were some factors for this success, which were the mind of self-sacrifice, solidarity of power of Women's Council, Movement of Kome Issho everyone could do easily, her tenacity, encounter with many supporters and so on. When the first anniversary of a founding of the school was held, she made tears of joy.

It was founded that her actions are equivalent of achievements of pioneers who served to establish special schools in Niigata prefecture, RYUSEKI OOMORI, TOKUJURO KANEKO and YOSHIKO SASAGAWA.

---

\*Research and Praxis Center for Education of Children with Disabilities

\*\*Tsudoi no sato (social welfare facility)

\*\*\*Joetsu University of Education, graduate school